

公開講演会『人の行動を誘発する環境デザイン』

原田昌幸

環境デザイン研究所の主催で「人の行動を誘発する環境デザイン」をテーマにした公開講演会を開催した。建築や都市に係わるデザインは、ユーザーの様々な活動要求に答える形で発展してきた。近年では、ユーザー自身が気付いていない要求まで一步踏み込んだ空間をデザインする建築が現れてきた。これらの建築の多くが、人の行動を自然な形で誘発することにより、より豊かで魅力的な空間の創造を目論んでいる。今回の講演会では、この『人の行動の誘発』に着目し、設計と研究に携わる4名の講師を招き、ワーカー行動の誘発に係るデザインや、家具による行動喚起、人の隠れた要求を探る行動観察などについて講演いただいた。本稿では講演会の内容や様子について報告する。

開催日：2018年11月10日（土）13:30-17:00

会場：名古屋市立大学・北千種キャンパス

芸術工学部棟 M101 教室

後援：日本建築学会東海支部、愛知建築士会

参加人数：39名

1. 「ワークプレイスとワーカー行動のデザイン」（中橋哲史 ／竹中工務店・設計部）

竹中工務店の中橋氏からは、創造性の向上や人間性の回復などを目指した新たなワークプレイスのあり方について設計事例を提示いただきながら、お話いただいた。最も時間を割いてお話いただいたのはパーパス富士宮工場で、ここでは、働く人が仕事をする場所を選択できるように、富士山の眺望や、豊かな自然とのかかわりなどを工夫したさまざまな場所を用意したことや、施主の協力のもと、それらの計画が狙い通りの効果を発揮しているのかを確かめるために実施した、移転前後のアンケート調査（POE、SAP）、インターバルカメラを用いた観察調査、加速度計



写真-1 中橋氏の講演の様子



写真-2 鈴木氏の講演の様子

を用いたワーカーの活動量測定の内容が紹介された。その結果、コミュニケーション量が3~4割ほど増加し、作業のしやすさ（作業効率）がよくなったと感じているとのことであった。

講演の後には、新しい概念を含んだ設計提案についての施主やワーカーとの合意形成の方法などについて質問が挙がった。

2. 「建築化された家具による行動のデザイン」（鈴木えいじ ／大建設計・代表取締役）

大建設計の鈴木氏からは、これまで設計されたオフィスを概説いただいたあと、今の自社屋について、建築と一体化させた家具を切り口にお話いただいた。設計事務所という性格上、模型や書類などすぐそば（手が届くところ）にあることが重要。そこで、10m四方の建築の中に、上階



写真-3 会場の様子

になるほど広くなる吹き抜けを中央に配し、その吹きぬけを取り囲むように、壁に向かって天井から吊るした奥行き深い棚を持つ机を配置するシステムを開発したとのことであった。その結果、見える収納にしたことにより、打合せがし易くなったことや、同じ仕事を担当するもの同士が隣の席でなくても振り返ればコミュニケーションが取れること、他者の仕事の状況が感じられるようになったことなどが紹介された。また、地域の職人の協力を得ながら、新たな試みとして制作した天井から吊ったブランコテーブルや、社屋の外構の植木の中に設置した高さ 2m のツリーテーブルなどが紹介された。

講演後の質疑では、新たに開発されたオリジナル家具の用途や建築コストなどについて関心が集まった。

3. 「家具で創る行動のデザイン」(花田愛/オカムラ・はたらくを科学する研究所、芸術工学部 OG)

オカムラの花田氏からは、ABW (Activity-based Working)、Communication、Well Being の 3 つをキーワードに、家具が創る空間と行動についてお話いただいた。働く空間の選択は創造性だけでなく、私たちのモチベーションに大きく影響を及ぼすことや、会話などのコミュニケーションの発生のしやすさは、滞在時間の長さが鍵となることなどが紹介された。また、研究所でおこなった家具の形状や空間のあり方に関する被験者実験や行動観察調査について幾つか紹介された。5人で共同作業する際のテーブル形状の実験では各班が提案したテーブルの形状は様々であったが5人の距離は概ね同じだったことや、壁面



写真-4 花田氏の講演の様子

ホワイトボードの研究ではホワイトボードの前に少なくとも 1.5m 程度の作業空間を用意する必要があることなどを発見したとのことである。その他、心と体の健やかさの重要性と、その一方策である、立って仕事をするという新しいワークスタイル (立ち会議、上下昇降デスクなど) のトレンドや、AI と共存した未来ビジョンについても紹介いただいた。

講演後の質疑では、被験者実験結果の解釈や、オカムラが描く未来ビジョンについて、踏み込んだ質問が挙げられた。

4. 「行動観察による隠れた要求の発見と設計提案」(原田昌幸/名古屋市立大学・環境デザイン研究所)

最後に著者が担当した。1 題目の中楯氏と 3 題目の花田氏の講演でも紹介された行動観察調査の考え方と手法について、名古屋市内の 2 つの街区公園における幼少の子どもを連れた母親の行動観察調査を事例に、紹介した。まず、先行研究の知見を利用した行動観察の着眼点と最終的な目標の設定、観察項目の決定までの流れを解説した。そのあと、インタビュー調査と行動観察の調査結果を示しながら、母子の滞在場所や滞在時間、子どもの遊びと母親同士のコミュニケーション発生を指標に、公園利用が母親にとって気分転換になっていることや、気分転換の要因の 1 つが他の母親とのコミュニケーションであること、コミュニケーションが発生するためには、同時に 2 組の親子が同じ遊具で遊ぶ必要があることなどを紹介した。最後は、研究の知見を踏まえた上での公園計画の提案で締めくくった。

講演後の質疑では、参加者の実体験をもとにした今後の公園のあり方に話しが及んだ。